

映像アーカイブの実践研究

平成28年度 活動報告

アーカイブとは元来、古文書保管所や公文書を指すが、コンピュータでも複数のファイルを一つにまとめたものをアーカイブと呼ぶように、写真や動画といった映像の保管についてもアーカイブという言葉が使われるようになってきている。本プロジェクトでは、映像を含めたアーカイブへの注目を念頭におきながら具体的な実践を行なう。

2015年度には、柳原銀行記念資料館が所蔵する写真資料を使ったワークショップの実践を行ない、またギャラリー@KCUAで開催された展覧会「岡崎和郎/大西伸明 Born Twice」にて、岡崎、大西両氏に行なったオーラル・ヒストリーの様子を記録した映像と、そこから抜き出した言葉を二人の作品の傍らに展示した。

2016年度は、ギャラリー@KCUAが毎年行なってきた「京都市立芸術大学美術学部同窓会展」に協力するというかたちで、映像を使ったアーカイブの試みを行なった。「同窓会展」は、本学の芸術資料館に収蔵された当時の卒業・修了作品を10年のスパンごとに展示する企画である。本年度は1980年代がテーマになり、「80年代再考のためのアーカイバル・プラクティス」という副題のもと、本研究センター研究員の石谷治寛が協力した。1980年代は今熊野から沓掛へ京都芸大が移転した年にあたり、この企画では大学環境と教育の変化を探ることが狙いである。本展では、買い上げとなった卒業・修了作品の展示と壁を隔てたスペースを設け、「アーカイバル・プラクティス」のためのラボとして、作業台とコンピュータ、スキャナを用意した。そのまわりに、もうひとつのテーマを掲げ、京都芸大と東京藝大の学生による自主交流展「フジヤマゲイシャ」展(1982-1987年)にまつわる資料と、参加した美術家による展覧会のカタログなどを展示した。会期中に追加提供を受け、吉田孝光氏によるミニコミ誌『RINGO』や「Good Art」展のカタログ、原久子氏が編集した雑誌『AC』の展示を加えることができた。また、原氏の協力で、同窓会展参加作家とのギャラリー・トークと、80年代初頭に「イエス・アート」などの展覧会を企画した山部泰司氏のインタビューを展示会場で行ない、設置したコンピュータ上でその記録映像を再生した。会期中は不定期で研究員がラボに在廊し、彌永ゆり子氏(美術家)の助力で、コンピュータ上での資料の再生や映像の編集を行なった。

誤解のないように言い添えておくと、芸術資源研究センターは当面、これらの資料を収集・保管することを目標にしていない。むしろ、個々人が保管している資料に一時的な出会いをもたらすことを通して、さまざまな語りの活性化や資料の利活用に開かれることを目指している。今回はデジタル資料の管理システムを調査する過程で、資料体の情報や権利者など資料体に関する情報を管理できるAtoM(<https://www.accesstomemory.org>)のテスト運用を行なった。AtoMの特徴として、オープンソースで自由に利用できること、アーカイブ情報を標準的なメタデータに沿って記述できること、写真、音声、映像、PDFなどのファイル形式のプレビューが可能であること、主題や作者名や資料間の関連づけが容易であることなどを確認した。資料情報の国際標準をクリアしながら、脱中心的な資料情報の利活用を行なうための方法を探求した。

石谷 治寛(芸術資源研究センター非常勤研究員)